

エテホン液剤 エスレル10	取扱メーカー： 石原、日産、琉産 原体メーカー： バイエル
成分： エテホン〔エチレン剤〕……………10.0%	性状： 黄褐色液体 毒性： 普通物 消防法： ——

【品目特性】……………

- 植物ホルモンであるエチレンの母体である。本剤は加水分解されてエチレンが生成される。
- エチレンは植物ホルモンで、熟期促進、開花促進、離層形成、花の性転換、休眠打破、側芽・発根促進など、植物生理作用に大きく影響する。
- 希釈液は酸性で金属腐蝕性がある。pH4.1以上でエチレン、リン酸、塩素に分解される。アルカリ性で急速に分解され、薬効を失なう。
- 有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】……………

- 植物ホルモンで作物への影響が強いので注意する。
- 散布量は薬液が葉先からしたたり落ちない程度とする。
- 〈なし〉
- ユズ肌の発生しやすい園での使用はさける。
- 品種により散布適期が異なるので使用方法を誤らないように注意する。
- 本剤を処理した果実は適期収穫に十分注意する。(熟期促進効果は、早生二十世紀で15日程度、長十郎で5日程度)
- 下記以外の品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効、薬害を十分確認してから使用する。病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
「長十郎、豊水、二十世紀、新水、幸水、八雲、新世紀、旭、早生二十世紀、新興」
- 〈西洋なし〉
- 摘果を目的として使用する場合、結実の少ない園では落果しすぎることがあるので注意する。
- 使用に際しては必ず病害虫防除所等関係機関の

指導を受ける。

〈おうとう〉

- うるみ果、みそたまの出やすい気象条件では使用をさける。
- 本剤を処理した果実は適期収穫に注意する。(収穫期が5日程度早まる。)

〈温州みかん〉

- コストなどで全摘果したい場合は樹全体に、また部分的に全摘果したい場合は摘果したい部分だけに、本剤の2000～8000倍液と、フィガロン乳剤の1000～2000倍液を混用し、均一に散布する。
- 摘果効果を高めるために気温が高くなることが予想される日に散布する。
- 本剤とフィガロン乳剤を所定濃度で混用して散布した場合、本剤(エテホン)の濃度が高い(2000倍)と旧葉の落葉を助長することがあるので注意する。

〈ぶどう(巨峰)(花ぶるい防止用)〉

- 極端に樹勢が強い場合は、安定型に移行させてから使用する。
- 樹勢の弱い樹では使用しない。
- あらかじめ芽かきを少なめにし、新梢数を多めにして必要な葉数を確保する。
- 果穂が短くなるので慣行より長めにする。

〈ぼんかん、たんかん、はっさく、きんかん〉

- 黄斑病、カミキリムシの発生園では使用をさける。
- 散布水量には特に注意し、葉先からしたたり落ちない程度に散布する。
- ぼんかん、たんかんでは、果肉先熟となり果皮着色の遅れが予想される時に使用する。
- はっさくの場合適期収穫に注意する。(散布後3～4週間で離層形成が促進され、落果しやすくなる)
- きんかんの場合、高温(24℃以上)の散布では、

散布量に十分注意する。

〈かき〉

●へたすぎ、果頂裂果の出やすい気象条件での使用はさける。

●果実の着色度合に注意し適期に収穫する。

●会津身不知、前川次郎では、処理時期が遅れたり、高濃度で処理した場合、汚染果実や裂果が発生することがあるので、使用時期、使用濃度を誤らないようにし、特に初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。

●平核無では、本剤を処理した収穫果の脱渋は80%以上の炭酸ガス法（CDS T方式）によって行う。

〈かき（西条）「熟柿栽培」〉

●熟柿栽培での使用方法のため、通常のかき（西条）の熟期促進の目的では使用しない。

●処理後、収穫時期が遅れると過熱が進み裂果、落果が多く発生することがあるため、著しい過熱になるまえに個別に収穫を進める。

●使用に際しては、必ず病害虫防除所等の関係機関の指導を受ける。

〈もも〉

●落果、裂果の出やすい気象条件での使用はさける。

●必ず適期に散布する。

●適期に収穫する（熟期促進効果は、白鳳で3～5日、あかつきで1～3日、川中島白桃で1～6日、清水白桃で1～4日）

●本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効・薬害を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

〈パイナップル〉

●100倍～200倍希釈処理では、本剤を4%尿素液で希釈し、開花を希望する日の約40日前に処理する。1000倍希釈処理では、本剤を2～4%尿素液で希釈し、出蕾を希望する20～120日前に2日間程度間隔をあけて2回処理する。また、小さい株への使用はさけ、大きな着果が期待できる十分な大きさの株に処理する。

●温度が高すぎる場合（約35℃以上）は使用をさける。

〈トマト、ミニトマト〉

●ハウス内では高温時（30℃以上）の散布はさけ、また散布後2～3日間は温度が30℃以上になら

ないように注意する。

●果房散布の場合は白熟期となった果房以外の茎葉や、上位段の幼果には散布液がかからないよう注意し、霧ふき器を使用して果房中心に散布する。

〈未成熟とうもろこし〉

●本剤を散布した未成熟とうもろこし（子実及び茎葉）を家畜の飼料に使用しない。

〈大麦〉

●止葉期処理においては、止葉が確認できた日を目安に適期に散布する。

●出穂始期処理においては、約30%以上の出穂を見てからでは、倒伏軽減効果が劣ったりするので、適期に散布する。

〈小麦〉

●止葉期処理においては、止葉が確認できた日を目安に散布する。

●出穂始期処理においては、適期に散布する。

●少水量散布（10 a 当り25ℓ）の場合は、専用ノズルを使用する。

〈かぼちゃ〉

●散布した株からは花粉が得られないため、周辺に散布していない株がない場合、授粉のための無散布株を用意する。

●散布時あるいは直後に極端な高温又は低温、降雨が予想される時は散布をさける（効果）。

●親蔓摘心、子蔓2本立てを行う。1株当りの着果数が通常より多くなるため、摘花（果）による着果制限（1蔓当り2果程度）を必ず行い、施肥等の管理を適切に実施する。

●散布後一時的に蔓の伸長が抑制される場合があるが、その後回復する。

●使用に際しては必ず病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。

〈いちじく〉

●使用時期を誤らないように注意する。

●使用に際しては必ず病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。

〈ほおずき〉

●未成熟なものには散布しない。

●薬液がかかった葉は落葉するので、必要な葉にかからないように注意する。

●散布は高温の日中はさけて行う。また本剤の散布前後は農家の散布は控える。

●新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効・薬害を十分確認して

から使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

〈きく〉

●効果は品種、気象条件等により差があり、また使用時期、使用濃度を誤ると効果が出なかったり、品質の悪い切り花がでるので、使用に際しては必ず病害虫防除所の指導を受ける。

●定植時の苗の揃いに注意し、その後も生育の揃ったものを仕立てる。

●老化苗には使用しない。

●新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効・薬害を十分確認してから使用する。なお病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

【薬効・薬害等の注意】……………

●調製には必ず水道水、井戸水を使用し、展着剤は加用しない。

●調製した薬液は、その日のうちに使用する。

●スピードスプレーヤーでの散布はさける。

●石灰硫黄合剤、ボルドー液などのアルカリ性薬剤との混用及び本剤散布の7～10日前後の近接散布はさける。前記以外の薬剤（フィガロン乳剤を除く）の場合も本剤との混用及び同日散布はさける。

●特に樹勢の弱い樹や生理障害の出やすい樹又は幼木には使用をさける。

●異常な高低温、多雨、乾燥など異常気象の続く時は使用しない。

●散布直後に降雨（効果が減退）があっても、再散布はしない。

●周辺の作物にかからないように注意する。また使用後の噴霧器などは十分洗浄する。

●共通注意事項6. 街路・公園・堤とう等で使用する場合は注意事項を参照。

【安全対策上の注意】……………



【適用と使用法】……………

作物名	使用目的	使用時期	希釈 倍数	使用 液量	本剤の 使用回数	使用 方法	エテホンを含む 農薬の総使用回数
なし（長十郎、豊水、 二十世紀、新水、 幸水を除く）	熟期促進	果実の横径が 60mm以上の時期 (満開後100日頃) 但し、収穫14日 前まで	1000～ 2000倍	200～ 300ℓ /10a	1回	立木全面 散布	1回
なし（長十郎）			1000倍				
なし（豊水）		果実の横径が 30～35mmの時期 (満開後60～70日頃) 但し、 収穫14日前まで	4000倍				
なし（二十世紀） なし（新水） なし（幸水）		果実の横径が 60mm以上の時期 (満開後100日頃) 但し、 収穫14日前まで	1000～ 2000倍				
西洋なし（ラ・フランス）	摘花	開花始期～ 満開2、3日後	1000倍				
西洋なし (フレミッシュ・ビューティ) 西洋なし (ゼネラル・レクラーク)	摘果	満開後 1～2週間					
ぶどう (巨峰（露地栽培）)	花ぶるい 防止	新本葉6～7 枚展葉時	6000倍	100ℓ /10a			2回以内（収穫後 ～剪定前は1回 以内、新本葉展 葉時は1回以内）

作物名	使用目的	使用時期	希釈 倍数	使用 液量	本剤の 使用回数	使用 方法	エテホンを含む 農薬の総使用回数	
ぶどう	落葉促進	収穫後～ 剪定前	500～ 1000倍	150～ 250 ℓ /10a	1回	立木全面 散布	巨峰(露地栽培) は2回以内(取 穫後～剪定前は 1回以内、新本 葉展葉時は1回 以内)、その他 のぶどうは1回	
いちじく	熟期促進	成熟予定15日 前(果実生長 第2期終期)		—	1果当り 1回	果面散布 (果面がぬ れる程度)	1果当り 1回	
おうとう(ナボレオン)		満開後4週間	2000～ 4000倍	300～ 500 ℓ /10a	立木全面 散布	1回		
おうとう(佐藤錦)		満開後3週間	2000倍					
ぼんかん たんかん	着色促進	着色始期 (ホタルジリ期)	1000倍	200～ 300 ℓ /10a				
きんかん		着色始期 但し、 収穫14日前まで	500～ 800倍					
はっさく	果実の離 層形成促 進(ひき もぎ収穫 のため)	収穫期の 3週間前	500倍					
温州みかん	全摘果	生理落果 最盛期 (満開10～20 日後)	2000～ 8000倍	250～ 500 ℓ /10a			1回	フィガロ ン乳剤の 1000～ 2000倍 液と混合 して、摘 果したい 部分に散 布
もも	熟期促進	収穫予定の 35日前以降 但し、収穫21 日前まで	4000倍	200～ 300 ℓ /10a			立木全面 散布	
かき(西条) 〔熟柿栽培〕	完熟促進	成熟 7～14日前	1000倍				立木全面 散布(散 布液が滴 り落ちない 程度)	
かき(富有)	熟期促進	着色開始期	4000～ 5000倍				立木全面 散布	
かき(平核無)		満開後 70～80日	5000倍					
かき(会津身不知)		収穫前 50～30日	20000倍					
かき(松本早生富有)								
かき(西村早生)		着色開始期	4000倍					100～ 200 ℓ /10a

作物名	使用目的	使用時期	希釈 倍数	使用 液量	本剤の 使用回数	使用 方法	エテホンを含む 農薬の総使用回数
かき（前川次郎）	熟期促進	着色開始期	5000倍	100～ 200 ℓ /10a	1回	立木全面 散布	1回
パイナップル	開花促進	通 年 （開花希望日 の約40日前）	100～ 200倍 （4%尿素 液で希釈）	25～50 ml / 株		葉面全面 散布	2回以内 （100～200 倍希釈散布 及び200倍 希釈注入は 合計1回以 内、1000倍 希釈散布は 2回、1000 倍希釈注入 は2回）
			200倍 （4%尿素 液で希釈）	20～25 ml / 株			
		通 年 （出蕾希望日の 20～120日前）	1000倍 （2～4% 尿素液で 希釈）	50 ml / 株 25 ml / 株	2回	葉面全面 散布 葉芯部 注入	
大麦	節間伸長 抑制による 倒伏軽減	止葉期～ 出穂始期	300～ 500倍	100 ℓ /10a	1回	全面散布	1回
小麦（春播栽培）		止葉期	75～ 125倍	25 ℓ /10a			
		止葉期～ 出穂始期	125倍				
			300～ 500倍	100 ℓ /10a			
		出穂始期	125～ 250倍	25 ℓ /10a			
			300～ 1000倍	100 ℓ /10a			
小麦（秋播栽培）		止葉期～ 出穂始期	75～ 125倍 300～ 500倍	25 ℓ /10a			
未成熟とうもろこし	稈長短縮 による倒 伏軽減	雄穂抽出始～ 50%抽出期	1000倍	100 ℓ /10a	茎葉 全面散布		
トマト（加工用）	熟期促進	収穫打切り 予定日の 2～3週間前	300倍		全面散布		
トマト（生食用） ミニトマト		各果房毎の 白熟期	300～ 500倍	5 ml / 果房	1果房に つき1回	果房散布	1果房に つき1回
かぼちゃ （西洋かぼちゃ）	雌花花成 促進	子蔓4葉期 （親蔓摘心）	500倍	20 ml / 株	1回	茎葉全面 散布	1回
ほおずき	着色促進	収穫2～4週 間前	400～ 1000倍	—	2回以内	果実散布 （果面がぬれる 程度）	2回以内
きく	開花抑制	摘芯時または 定植後1週間 以内 及びその後 10～14日毎	500～ 1000倍	2～10 ml / 株	3回以内	全面散布 （株全体がぬれる 程度）	3回以内
きく（電照栽培）	早期不時 発蕾防止	親株摘芯時	500倍				
ゆきやなぎ	落葉開花 促進	促成前日～ 10日前	1000倍	600 ℓ /10a	1回	立木 全面散布	1回